

学校名	和歌山市立雑賀小学校
授業者	赤松 広志

## 1. 単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

### 1-1. 単元名

「かわかみの水」から始まる紀の川の旅 ～森・川・海 水でつながる暮らしと人～

### 1-2. 学年

4年生

### 1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

総合的な学習の時間、社会科

### 1-4. 単元について

子供達と学習材との出会いは、奈良県川上村から届く「かわかみの水」である。紀の川の水源近くのわき水から作られるこの水を飲んで子供達は大喜びだった。

#### 写真 「かわかみの水」とラベル



- ・水を飲んだ感想は、おいしかったです。理由は、ふつうの水とちがっておいしいし、つめたかったので暑い夏にぴったりだと思いました。この水を飲むと山、林や森にいるような感じがしました。
- ・ラベルを見て、木がだんだん高くなっていることに気付いた。なぜ水なのに絵が木なのだろう。
- ・このラベルは、木を植えて、切ってというストーリー性があってすごいと思いました。

「かわかみの水」との出会いから、水への関心が高まる一方、調べていきたい疑問も生まれてきた。それは「かわかみの水」のラベルである。木が育っていく様子や人の姿が描かれた絵や「吉野・川上村 水源地の村づくり」と書かれたロゴマーク等から水が生まれる場所や奈良県川上村へも関心が向いていった。そこで奈良県川上村について、どのような場所かを調べていくことにした。子供達は、調べ学習を通して川上村では古くから林業が盛んに行われ、森を大切にしてきたこと、水源地にある村として、きれいな水を下流に送るなどの宣言を掲げていることを知った。

しかし、「森を大切にしていること」と「きれいな水がとれること」が結びつかず、ラベルの絵になぜ木が描かれているのかについては、納得いかない様子だった。そこで「かわかみの水」を送ってくれた川上村の「森と水の源流館」の館長である尾上さんと手紙やビデオレターのやり取り、またオンラインによるリモートでの対話を通して交流を重ね、「かわかみの水」のラベルに木が描かれている理由について考えを深めていっ

た。その際に子供達が考える手がかりとして使用したのが、尾上氏が作詞し、紀の川の上流から下流までの水のつながりを表現した曲「水の旅のはなし」である。この曲の歌詞に意味を読み取ることで、森と水の関係、さらに作詞した尾上さんが曲に込めた思いに迫っていった。

資料 「水の旅のはなし」の歌詞から水のつながりについて考える

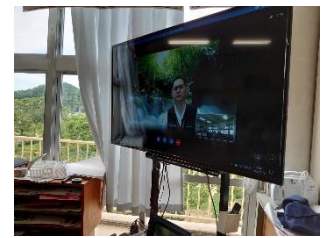
●「紀の川に生きるESD」のテーマ●

水の旅のはなし 作詞/尾上 忠大 作曲/松谷 文英

1. お・い・し・い・ね このお水  
どこからやってくるのかな？  
じょうずい場 ダムにポンプに・・  
どれもあるから とどくだ。  
でも は・て・な  
水はどこから はじまるの？  
それは 山の向こう すいげんの森から  
おち葉や横っこ 小さな生き物たちのおかげで  
雨をたくわえ やがて生まれる はじめの一てき  
いのちの森から 川がはじまる

2. お・い・し・い・ね このお米  
どうしてつくっているのかな？  
農家さん 心をこめて  
そだてるから できるんだ  
でも は・て・な  
水がなければ どうなるの？  
むかし すくない雨 こまっていた奈良ほんち  
夢がかなった よしのがわぶんすいのおかげで  
森からの水 ダムへとたまり 川をくだって  
田んぼにとどいた 山をちこえて

3. お・い・し・い・ね お魚も  
どうしてとれなくなるの？  
漁師さん 海をあいして  
とっているから つづくんだ  
でも は・て・な  
海にも川が そそいでる！  
とおい 森から流 田んぼ流した水  
そこであった 命と力たくわえながら  
やがて海へと ながれてゆく ゆたかな海は  
つながってるんだ ゆたかな森と  
つながってるんだ ぼくたちと



- ・森と水の関係は、助け合っていると考えました。理由は、森は水がなければ育たないし、森が水をたくわえ川をつくるからです。
- ・森と水の関係は、森から水が流れて、みんなの家や田んぼにとどいて、また森にもどってくると考えて、つながっていると思いました。つながっているからこそ、おいしいお水、お米、お魚があると思います。
- ・ぼくは、尾上さんが作った歌を聞いて、水は大切ということを知りました。雨や森がなかったら、ぼくらは動物も生きられないから、「水を大切にしよう」ということを伝えていきたいと思います。尾上さんは人や生き物が全部水とつながっていることを知ってもらいたいということを伝えたいのだと思いました。

この活動を通して、子供達は森と水の関係を「森と水は助け合っている。」と関連付け、さらに森で生まれた水が下流の米や魚を育てていくことを読み解き、水を通した「つながり」に気付くことができた。

ここまでの活動で、子供達は、森から水が生まれることや、水の循環の過程の中で第一次産業が営まれていることを知った。また、水源地について知るにつれ、「実際に川上村に行ってみよう。」という思いを強くしていった。そこで川上村見学を計画し、実際に上流の水に触れたり、森と水の源流館において水源地のことや水源地を守る取り組みについて話を聞いたりすることにした。

写真 川上村見学



・わたしは、川上村のチゴロブチ（活動した川の呼称）で、とう明な水を見て、今までこんなにとう明な川を見たことがありませんでした。さわってみてもとても冷たかったです。岩があって、流れが弱いところもあれば、手がたえきれないほど強いところもありました。川上村では、とても自然がいっぱいあって、川や森がたくさんあってきれいでした。虫もたくさんいたけど、それも自然があるからこそ、いたんだと思います。たくさん自然を体験できてよかったと思います。

・ 森と水の源流館では、すごくいろいろなことが分かりました。上流～下流の水そうがあり、上流～下流の水の色がちがいました。他にもちがう点があつて、魚の種類や大きさなどすべてがちがって、上流と下流では、どれくらいの変化があるのか1回調べてみたいと思いました。そして、水はつながっていて、下流から上流はすべてつながっていて水道にとどくことを知りました。すごいな～と思いました。～中略～そして、源流館シアターで観た映像で分かったことがあります。森は起こりや始まりの地ということがすごく印象に残っていて、森を守ることは海を守ることも同じでつながっていることが分かりました。

子ども達は、川上村での紀の川上流の川に触れる活動を通して、これまでに学習してきた「森から水が生まれること」に関わって、生まれたての水の透明度や冷たさを実感することができた。また森と水の源流館での学習を通し、その水が自分達の生活にまでつながっていることを改めて考えることができた。

このように、川上村の学習が遠く離れた場所についての学習ではなく、自分達の生活につながる学習であることに気付いた子ども達は、より自分事として身近にある川や海の水を捉え直し、紀の川の河口への見学や地域の海のビーチクリーンに主体的に取り組んでいくことができた。

写真 紀の川河口見学



写真 地域の海のビーチクリーン



#### 1-5. 単元設定の理由・ねらい

紀の川は、奈良県大台ヶ原を水源とする、和歌山県を横断する河川である。奈良県に入ると「吉野川」と呼ばれ、流域では、昔から林業・農業・漁業と第一次産業が盛んに行われている。この吉野川・紀の川を学習することで、子供達は、山から川、川から海、海から雲となり雨が山へとといった「水の循環」を知り、さらにその水の恵みとして第一次産業が営まれることを学ぶことができる。

本単元では、子供達は紀の川の下流域に位置する本校のある和歌山市雑賀地区と上流域に位置する川上村が紀の川を通じ、水でつながっていることを学習する。子供達は、川上村に住む方達と交流したり、川上村が水源地にある村として、きれいな水を下流に送るなどの宣言を掲げていることを知ったりすることを通し、身近に流れる川の水が自分達だけのものではなく、つながりの中にあるものととらえることができると考える。このことが、高学年において、地域の海の魅力を見つけ、海の問題を社会全体の切実な問題として考える素地になると考え、本単元を計画した。